

出現するほとけ—密教経軌の記載を中心に

佐々木守俊

はじめに

密教経軌のなかには、修法の本尊とされる仏像が行者の祈りによって動いたり発声するとの記載をもつ例がある。なかでもよく知られているのが、耶舎崛多訳『仏説十一面観世音神呪経』（北周・天和5年〈570〉ころ）と阿地瞿多訳『陀羅尼集経』所収『十一面観世音神呪経』（唐・永徽5年〈654〉）である。これらの経典は、観音が修法の場である道場にじっさいに來臨し、それに応じて仏像が動き、発声すると説いている。この発想は、本体である観音と造形物である仏像の同一視を意味するものといえる。すでに指摘のあるとおり、平安時代初期に制作された十一面観音像には意識的に動きを表現した例が多く、それらは経典の記載をかたちにあらわしたものと考えられている。この種の動きの表現は、「ほとけの出現」という奇瑞の形象化が造像のテーマとなっていたことを伝えており、当時の仏像観を知るうえできわめて興味深い。

本稿では先行研究に導かれつつ、『仏説十一面観世音神呪経』と『十一面観世音神呪経』にくわえ、2つの密教経軌を考察対象とし、ほとけの出現とその場における仏像の役割がいかん語られているかをみてゆくこととする。さらに、代表的な如意輪観音像である大阪・観心寺像に注目し、実在感ある艶麗な像容が、じっさいの観音の出現を意識させる存在として位置づけられていた可能性を考えてみたい。

1、ほとけの來臨

『仏説十一面観世音神呪経』には、十一面観音の出現が以下のように説かれている。

爾時其人造此像已。欲求心中所願者。（中略）處中施一高座置觀世音像。像面向西。（中略）至十五日夜。時觀世音來入道場。其梅檀像自然動搖。其像動時三千大千世界俱時振動。其像頂上仏面出聲讚行者言。

善哉善哉善男子我来看汝。所有願者今悉満足。(後略)¹

『十一面觀世音神呪經』にもまた、これとほとんど同様の記載がみられる。

爾時其人造此像已。欲求心中所願成者。(中略) 正壇中央施一高座。置十一面觀世音像。像面向西。(中略) 至十五日夜静之時。觀世音菩薩来入道場。其梅檀像自然動揺。爾時三千大千世界。一時振動。其像頂上仏面出声。讚行者言。善哉善哉善男子。我来看汝。所有願者悉令満足。(後略)²

白梅檀で造られた十一面觀音像を西向きに高座に安置して供養を続けると、15日目の夜に「觀世音(菩薩)」が「来たりて道場に入る」。それとともに、安置されている「梅檀像」が「自然に動揺」し、「三千大千世界」も「一時に振動」する。続けて、「その像の頂上仏面」が「出声」して「行者を讚え」、「善きかな善きかな善男子。我来たりて汝を看る。願いあるところは悉く満足す」というのである。この箇所要点は、ほんらい造形物である仏像が動き、発声することだが、その前段階として「觀世音」、すなわち礼拝の対象である十一面觀音がじっさいにやってくると説かれている点はおおいに注目される。この段階で十一面觀音の姿が行者にみえているかは明記されていないが、行者は仏像の振動を目撃し、頂上仏面が発する声を聞くことで、十一面觀音が確かに道場内にいることを実感するのである。

井上一稔氏は、平安時代初期の十一面觀音像の多くが顕著な動きをあらわしていることについて、これらの經典の記載からの影響を指摘した³。奈良・法華寺像(図1)はその代表例で、右足をおおきく踏み出す動作、それに連動した体の構え、風になびく着衣や頭髮の表現は、經典にいう仏像の「動揺」の造形化と理解される。また、本像はビヤクダンと質感の近いカヤ材を用い、像表を素地仕上げとする、いわゆる代用檀像である。いうまでもなく、これは日本における「梅檀像」の解釈であり、やはり經典からの影響がよみとれる⁴。経軌の記載はふ

¹ 『大正藏經』20-151a。

² 『大正藏經』18-824b~c。

³ 井上一稔「十一面觀音像の表現—日本における展開を中心として—」(『シルクロード学研究』11、平成13年)。

⁴ 檀像については、井上正『檀像』(『日本の美術』253) 至文堂、昭和62年

つう、尊像の面や手足の数、肉身色、服装、持物など、図像的な特徴を規定するものだが、十一面観音のばあいは修法の場における動きという、図像規定とは別次元の要素が語られ、さらにそれがじっさいの造形に反映されていることをあきらかにした点で、氏の指摘は重要性が高い。

さらに注目されるのは、『仏説十一面観世音神呪経』と『十一面観世音神呪経』が、修法の成就の条件として十一面観音の来臨を説き、像の動きと頂上仏面の発声を来臨の証徴として位置づける点についての考証である。十一面観音を本尊とする修法において、その成就のために「偶像に観音の本体が宿」ることが要求されるとともに、「観音の出現を如何に効果的に見せるか」が工夫され、それが「像の動きになって表出されている」ことが指摘されたことの意義はおおきい。氏はまた、京都・海住山寺十一面観音立像にかんする論考でこの問題を再度とりあげ、「我国の神が寄り代に依るように、白檀像に観音が依ることにより、像が動く」「白檀による木像が、生身の観音へと変化を遂げ」との解釈が存在していたとのべる⁵。この解釈にしたがえば、動きを表現した十一面観音像とは、観音の本体が宿って動くさまを先取りして造形されたものということになるだろう。いいかえれば、修法のクライマックスにおいて本体の観音が依っていることをより強く印象づけるよう、あらかじめ像に動きの表現を与えておいたとも考えられる。

『十一面観世音神呪経』とおなじく『陀羅尼集経』におさめられる『般若波羅蜜多大心経』には、「諸仏菩薩金剛天等」を供養する功德として、彫像の放光から見仏にいたる10の瑞相が説かれる。まずは供養の方法である。

若人欲得日日供養十方一切諸仏菩薩金剛天等者。若在房内及仏殿中。而供養之。(中略) 当設二十一種供養之具。作般若波羅蜜多法会。(中略) 一者嚴飾道場安置尊像。復以種種香。所謂龍腦丁香。麝金沈水。香湯浴像還置本处。二者像前当作水壇。三者龍腦沈水。上妙香等用塗像身。四者諸妙花鬘。絞珞仏身左右肩上。五者頂掛天冠。六者宝釧瓔珞莊嚴仏身。(後略)⁶

を参照。

⁵ 井上一稔「海住山寺奥の院本尊 十一面観音立像（重要文化財）について」（海住山寺ホームページ 解脱上人寄稿集 <http://www.kaijyusenji.jp/gd/kiko/sentence/k4.html>）。

⁶ 『大正蔵経』18-809c~810b。

「諸仏菩薩金剛天等」の供養は「房内」または「仏殿中」でおこなわれ、21種の「供養の具」が用いられる。道場に安置された「尊像」には香湯を浴びせ、香を塗り、花鬘を肩すからめ、「天冠」を頂に掛け、宝釧瓔珞で仏身を莊嚴するとある。以上の記述から、「尊像」とは彫像であることがわかる。そして、供養の結果として「十種瑞相」が説かれる。

一者像上放光。二者風不吹而道場中幡自然動揺。三者雲不覆而天有雷声。四者道場中燈長三四尺。五者香鑪中人不燒香而香烟自出。六者空中聞有種種音樂之声。七者感得四方無事福寿延年無諸疾病。師子虎狼諸毒虫等不能為害。八者於五欲境心無染著。九者諸魔鬼神不能燒乱。自他之病療即除癒。十者見仏菩薩金剛天等。若於夢中見仏菩薩。或昇高山。或上高樹。乗船度岸。或騎象馬。⁷

「一」は「像上の放光」である。「像上」とは像の表面という意味だろう。放光は仏像の起こす奇瑞では代表的なものである。「二」は、風がないのに道場中の幡が「自然に動揺」する。「自然動揺」は十一面観音像の奇瑞についても用いられた表現であり、ほとけの本体の来臨を示唆している可能性が考えられる。「三」～「六」は、雲がないのに雷鳴が聞こえ、燈明が長く伸び、焼香しないのに香煙が出、空中に音楽が聞こえるといった奇瑞である。「七」～「九」ではもろもろの功德が得られると説く。そして「十」では、「仏菩薩金剛天等」をみる、もしくは夢中に「仏菩薩」をみる功德が説かれるのである。ほとけたちはあるいは高山や高樹に登り、あるいは船や象・馬に乗るといふ。このほとけたちが本体なのか、それとも本尊として道場内に安置された仏像が動いているのかは明確でないが、十一面観音のばあいを参考にすれば、瑞相の最終段階としての見仏は「仏菩薩金剛天等」の来臨を念頭に置いて記載されていると考えてよいだろう。

『陀羅尼集經』は十一面観音像の造像のほか、四天王像の図像規定にもおおきな影響力をもっていたことが知られている⁸。こうした重要な雑密經典でほとけの出現や仏像の起こす奇瑞が説かれたことは、修法における仏像の役割にたいする期待を高めたものと想像される。た

⁷ 『大正藏經』18-811c~812a。

⁸ 瀬山里志「陀羅尼集經様四天王像の日本における受容と展開」(『仏教芸術』239、平成10年)。

だし、玄奘訳『十一面神呪心経』（唐・顕慶元年〈656〉ころ）⁹と不空訳『十一面観自在菩薩密言念誦儀軌経』（唐・天宝5～大暦5年〈746～70〉）¹⁰は、十一面観音像の動きと発声を説くものの、前提となるほとけの本体の来臨についての言及を欠く。これは、密教儀礼が洗練されてゆくなかで、ほとけの存在が観念化され、その来臨と仏像への作用というプロセスへの意識が薄まったことが一因と考えられる。しかし、9世紀にはいつて日本に請来された、唐・解脱師子訳『都表如意摩尼転輪聖王次第念誦秘密最要略法』（略称『都表如意輪儀軌』）は、依然としてほとけの出現を説いている。次節ではこの『都表如意輪儀軌』の記載をみながら、修法における本尊像とほとけの本体との関係を考えてみたい。

2、如意輪観音の出現

9世紀初頭には、現図胎蔵界曼荼羅に代表される中国由来の画像・図像を通じ、六臂如意輪観音の具体的な像容が日本でも知られるようになっていた。『都表如意輪儀軌』が請来されたのは、それよりのちのことである。安然撰『諸阿闍梨真言密教部類総録』（八家秘録）には「都表如意輪瑜伽一卷[■]」の記載があり、請来者として「睿」こと宗叡（809～84）の名が挙げられている¹¹。宗叡は「後入唐僧正」の名で知られる真言僧で、貞観4年（862）に入唐、同7年に帰朝して多くの密教経軌や図像類を請来した。『禅林寺宗叡僧正目録』は、宗叡の数ある請来品のひとつとして「都表如意輪瑜伽一卷」を挙げている¹²。

『大蔵経全解説大事典』によれば、「都表」とは「諸尊の広大にして甚深の徳を観世音菩薩一尊に表す」語である。経題に「転輪聖王」の語がみられることは、『都表如意輪儀軌』の特徴として注意される。「相貌品第一」には「若有修此三昧耶 須具七種殊勝相 猶如輪王持七宝王四天下皆降伏」¹³の記述があり、如意輪観音の功德が、転輪聖王（四天下を統一して正法をもって世をおさめる王）の七宝にたとえられている。『都表如意輪儀軌』は、如意輪観音と転輪聖王の親近性をはっきりと表明する点で、仏法と王法の接点としての性格をよくあらわして

⁹ 『大正蔵経』20-154a～b。

¹⁰ 『大正蔵経』20-141b。

¹¹ 『大正蔵経』55-1123b。

¹² 『大正蔵経』55-1111c。

¹³ 『大正蔵経』20-217b。

いるのである。この点については次節でとりあげることとし、まずは観音の来臨をのべる記述をみてゆきたい。

「相貌品第一」はまた、修法のさいの道場と本尊像について以下のようにしるす。

（前略）次説順諸念誦法 復択清浄吉祥地 或在山間及池辺 或在伽藍精室処 或仏舎利神塔中（中略）復次安置本尊者 行者自須敷已座 尊面西方在目前 行者像前面東坐（後略）¹⁴

道場は「清浄吉祥の地」や「山間」「池辺」、あるいは「伽藍精室の処」「仏舎利神塔の中」に設営される。「本尊」を彫像とするか、画像とするかについては規定されていない。尊名も明記されていないが、如意輪観音像であることはいうまでもない。

さらに、「根本密言品第三」は本尊の観想と念誦、その結果としての観音の出現・所願の成就を説く。

復説根本軌儀法 想念奉請大聖王 誦此密言及結印 一一自想往彼山 存心頂礼而奉請 迎引尊者入道場（中略）行者像前端坐思惟。存心諦観布多勒伽山。衆宝荘嚴華果茂盛（中略）誦此真言。於七日中満三十萬遍。聖者即現持誦人前。随心所求皆得成就（後略）¹⁵

「大聖王」「尊者」「聖者」とは、みな如意輪観音をさすと考えてよい。行者は「大聖王」を「奉請」することを「想念」し、「密言」を誦して「結印」する。じっさいに如意輪観音が道場にあらわれる前段階として、行者は「尊者を迎引して道場に入れる」ことを想念するのである。さらに行者は「像前にて端坐して思惟」し、観音の住处である「布多勒伽山」（補陀落山）を諦観する。そして「真言」を七日にわたって誦し、「三十萬遍」に達したとき、「聖者」が「持誦する人の前」に「現れる」のである。

行者の祈りに応じてほとけが道場に来臨するとの考え方は、前節でみた諸經典と共通する。「聖者」と「本尊」（「像」）の関係はあいまいだが、本尊像が観想を助けるとともに、如意輪観音の本体の来臨を行者に強く意識させる存在として機能していることは認めてよいと思わ

¹⁴ 『大正蔵経』20-217b。

¹⁵ 『大正蔵経』20-217c~218b。

れる。とくに重要と思われるのは、「聖者」が行者の前に「現れる」と明記されている点である。この記述によれば、ほとけの姿は観想のなかの存在を超え、まちがいなく行者に目撃されている。じっさいに行者の目に映るのは本尊像かもしれないが、ここでは本尊像は「聖者」そのものとして存在しているか、もしくは如意輪観音の本体が依った状態とみなされているといえるだろう。そして、如意輪観音の出現（行者からすれば見仏）は、「心の求むるところに随い、みな成就を得る」ことを保証している。尊像の前での儀礼がほとけの出現をうながし、結果として所願が成就する一連の流れを、『都表如意輪儀軌』は明快に説いているのである。

3、『都表如意輪儀軌』と観心寺如意輪観音像

ところで、『都表如意輪儀軌』の請来者が宗叡であることには、美術史的・密教史的にはおおきな意味があると考えられる。それは、宗叡は師の真紹（797～873）より、如意輪観音坐像を本尊とする観心寺を相承しているからである。

観心寺像（図2）は、元慶7年（883）の『観心寺勘録縁起資財帳』所載の講堂安置像にあたりと認められている¹⁶。高貴な女性を思わせる艶麗な表情、豊満でありながら引き締まった体軀、像表に乾漆を併用してやわらかな肉づきを表現する技法などから、9世紀密教彫刻の最盛期である承和年間（834～48）を中心とする時期に、有力な皇族の発願によって官営工房で造像されたことはまちがいない。西川新次氏は『資財帳』に載る「嵯峨院大皇太后御願堂」、すなわち嵯峨天皇の皇后・橘嘉智子（786～850）の御願堂を安置堂宇の講堂とみなし、本像も嘉智子の発願と考えた¹⁷。この指摘は大方の指示を得ており、最近の研究では、承和10年（843）に河内国守を観心寺俗別当とすることが定められ、真紹が内供奉十禅師に補任されたのと軌を一にして、本像が発願されたとのみかたが有力視されている¹⁸。

¹⁶ 西川新次「伝来」（丸尾彰三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代重要作品篇』3、中央公論美術出版、昭和52年）。

¹⁷ 西川新次「備考」（註16書）。

¹⁸ 井上一稔「観心寺如意輪観音坐像追考—観音の女性性という視点から—」（『文化学年報』63、平成26年）、佐藤全敏「観心寺如意輪観音像 再考」（『美術研究』413、平成26年）。なお、津田徹英「観心寺金堂 如意輪観音坐像」（『週刊朝日百科 国宝の美』17 彫刻7 平安初期の密教彫刻、朝日新聞出版、平成21年）は像の完成年次として承和10年に注目する。

では、『都表如意輪儀軌』と観心寺像のあいだにはなんらかの関係があるのだろうか。この問題についても、井上一稔氏が重要な考察をおこなっている¹⁹。氏は観心寺像に表出された顕著な女性性について、仏教的な理想の皇后で王権の護持者である玉女の姿が重ね合わされたものとみた。さらに、『都表如意輪儀軌』が如意輪観音の功德を転輪聖王の七宝にたとえる点に注目し、七宝の中に玉女宝が含まれること、経題に「転輪聖王」の語がみられることから、同軌が観心寺像の女性性の典拠となった可能性を指摘したのである。女性性の表現を具体的な儀軌の内容にもとづいて説明した点は、本像の研究におけるおおきな進展といえる。ただし、氏も認めるとおり、『都表如意輪儀軌』の請来者を貞観7年帰朝の宗叡とすると、造像年代を下回ってしまう。そこで、宗叡以前の入唐経験者のなかで請来者として想定されているのが、嘉智子と接点のあった恵尊（生没年不詳）と、室生寺を拠点とした円修（生没年不詳）である。とくに円修は『五十卷鈔』や『白宝抄』では『都表如意輪儀軌』の請来者とされており、その存在はおおいに注目される。

問題は、円修が承和11年（844、唐の会昌4年）の時点でまだ唐に滞在していたことである。同年2月9日付の『大唐国日本国付法血脈図記』（園城寺蔵）によれば、このとき円修は弟子の堅慧とともに天台山禅林寺におもむき、最澄・義真に続く日本天台宗の正統な後継者であることの証明を得ている²⁰。本像の発願を承和10年とみると、円修の『都表如意輪儀軌』請来がまにあわないのである。以上の点より、円修が本像の造像に影響をおよぼしたとは即断しがたい。いっぽう恵尊のばあいは、本像の発願以前に同軌を請来していた可能性を残す。そうだとすると、宗叡による請来の事実は変わらない。むしろ、重ねて同軌を請来したとすれば、なんらかの積極的な理由が存在したものと想像される。本稿では井上氏の指摘の重要性に注目し、観心寺像のしめす女性性が『都表如意輪儀軌』と関連する可能性を考慮しつつ、宗叡がみずから請来した同軌にもとづいて本像をあらたに意味づけたとみる立場から、そのねらいを検討してみたい。

観心寺で如意輪観音像がどのように礼拝されていたかを知る手がかりとしては、『資財帳』に載る「唐白瓷湯壺二口」の存在が注目される。ここには「観音菩薩料。大法師恵淑奉納。」との付記がある。『都表如

¹⁹ 井上一稔「観心寺如意輪観音像と檀林皇后の夢」（笠井昌昭編『文化史学の挑戦』思文閣出版、平成17年）。

²⁰ 遠日典『室生寺 山峽に秘められた歴史』新人物往来社、平成7年。

意輪儀軌』には、香水を盛って「聖者」に奉る容器として、「新銅器」または「白瓷器」を用いることが説かれている²¹。「観音菩薩料」として奉納された「唐白瓷湯壺」とは、同軌にいう「白瓷器」にあたる可能性が考えられる。奉納者の恵淑は、『資財帳』が勘録された10日後の元慶7年9月25日に、宗叡により「門徒中之首兄」として観心寺座主に定置されている²²。これにさきだつ8月13日にも、恵淑は但馬国の「水田白田」を「燈料」として奉納している。「唐白瓷湯壺」も同様に、座主就任を控えた恵淑が寺地や什物の充実をはかって奉納したのではないだろうか。「観音菩薩料」である「唐白瓷湯壺」の存在のみをもって、『都表如意輪儀軌』にもとづく如意輪法が修されていたとは断言できないが、この時期に寺の中心的人物が如意輪観音像を重視していたことは認めてよいだろう。

本像の熱気を帯びたなまめかしい表情、切れ長で大きな目、ぼつてりとした唇、やわらかな肉づき、あたたかみすら感じさせる肌合い、自然な手足の動きは、あたかも如意輪観音が顕現したかのような実在感を生み出している。観心寺で『都表如意輪儀軌』にもとづく如意輪法が修されていたと仮定するならば、本像のしめす実在感は、儀軌に説く「聖者」の出現を行者に強く印象づける要素となりえたのではないだろうか。それは、平安初期の十一面観音像がしめす動きの表現が、ほとけの本体の来臨を思わせるものだったのと似ている。宗叡が『都表如意輪儀軌』を請来したことによって、本像は「行者の目前に出現する如意輪観音」と理解され、同軌にもとづく如意輪法の本尊というあらたな性格を獲得したものと思われる。

貞観10年、宗叡は真紹から観心寺を相承した(同年1月23日付「権少僧都真紹付属状」²³)そして翌年6月13日、観心寺は定額寺に列せられた(『資財帳』)。これにさきだつ6月9日には、河内国高田庄などが施入され、寺の経済力の強化がはかられている(『資財帳』)。定額寺化の奏請者は真紹だが、清和天皇(850~80)と宗叡の密接な関係はその主要因としてみのがせない。高橋早紀子氏は、貞観9年ころの造像と認められる東寺西院不動明王坐像について、技法や図像の検証から宗叡が造像に関与した蓋然性を指摘するとともに、新羅の脅威や貞観8年の応天門の変などによる社会不安が高まるなか、清和が国家安穩を祈り、宗叡請来の『聖無動尊安鎮国家法』にもとづき造像させたと

21 『大正蔵経』20-218a。

22 西川新次・水野敬三郎「観心寺勘録縁起資財帳・備考」(註16書)。

23 註16書。

の見解をしめしている²⁴。観心寺の定額化も、清和と宗叡の連携による一連の真言密教興隆事業として、東寺西院像の造像に続いておこなわれたとのみかたが可能だろう²⁵。

当時、清和の身边におこった重要なできごととして、貞観 10 年 12 月 16 日の貞明親王（のちの陽成天皇）の誕生と貞観 11 年 2 月 1 日の立太子が挙げられる。清和は 3 人の兄を押しつけて生後 8 か月で立太子し、9 歳で即位した。当時としては異例の幼帝として即位した清和にとって、皇統の安定は重要な課題であり、第一皇子の貞明の誕生はおおきな希望だった。そのいっぽうで、さきにものべたような内憂外患への対応に苦慮していたことも事実である。観心寺の定額寺化にあたっては、皇統の安定と国家安穩を祈る寺としての性格が確認され、如意輪観音像の効験もその視点から期待されたにちがいない。

観心寺が如意輪観音を祀る寺であること、さらに宗叡が『都表如意輪儀軌』を請来していることは、清和朝における寺の位置づけをあきらかにする手がかりになると思われる。同軌は経題からも知られるとおり、「転輪聖王」をキーワードとする儀軌である。そして、清和は「金輪聖王」（金輪・銀輪・銅輪・鉄輪聖王に分かれる転輪聖王のなかの一つ）になぞらえられる天皇だった。工藤美和子氏によれば、天皇＝転輪聖王という位置づけが急浮上してくるのは応徳 3 年（1086）に堀河天皇が即位したころからだが、それ以前にも限られた天皇については転輪聖王とみなされていたという。その早い例が清和なのである。『日本三代実録』には清和天皇を金輪聖王とみなす記述が 2 箇所確認されている。貞観元年 4 月 18 日条の藤原順子（仁明天皇女御、清和の祖母）願文では清和を「金輪」と称しており、同年 8 月 28 日条の恵亮の上表文では、清和を「金輪陛下」と呼んでいる²⁶。このような状況下に

²⁴ 高橋早紀子「東寺西院不動明王像の制作における宗叡の関与」（『日本宗教文化史研究』19（2）、平成 27 年）。

²⁵ 丸山士郎氏は貞観 11 年の定額寺化を観心寺の転機ととらえ、現在も寺に安置される仏眼仏母如来坐像と弥勒如来坐像はこのときの造立とのみかたをしめす（丸山士郎「安祥寺五智如来像、観心寺仏眼仏母如来像・弥勒如来像とその周辺」（『MUSEUM』514、平成 6 年）。筆者もこれに賛同する。拙稿「密教絵画から彫像へ—曼荼羅・図像の請来と彫像化—」（伊東史朗責任編集『日本美術全集』4、小学館、平成 26 年）。

²⁶ 工藤美和子「忠を以て君に事へ、信を以て仏に帰す——〇～一一世紀の願文と転輪聖王」（同『平安期の願文と仏教的世界観』思文閣出版、平成 20 年）、同「仏界の荘嚴—法勝寺とは何のために建てられたのか」（『佛教大学総合研究所紀要』別冊 2 洛中周辺地域の歴史的変容に関する総合的研究、平成 25 年）。

あって、如意輪観音の功德を転輪聖王の七宝になぞらえる『都表如意輪儀軌』を宗叡が請来したのは絶好のタイミングだった。宗叡が同軌にもとづいて観心寺如意輪観音像に再注目することは、転輪聖王＝清和の徳を讃えることに通じる。そして、実在感に富む本像のまえで同軌にもとづく修法をおこなうことは、如意輪観音の出現＝見仏の奇瑞をひき起こし、その結果として「心の求むるところに随い、みな成就を得る」功德、すなわち清和朝の安穩を実現する行為と認識されていたと考えたい。

おわりに

本稿ではほとけの出現を説く4つの密教経軌をとりあげ、仏像の表現との関係を考えてみた。とくに、『都表如意輪儀軌』は観心寺において、既存の如意輪観音像を「行者の眼前に出現するほとけ」と性格づける思想的根幹として機能したと思われ、像のしめす実在感との関連から興味深い。密教経軌の記述と仏像の関係を考察するさい、図像的特徴の規定がおもに注目されるが、経軌が仏像観の形成にあたえた影響もすくなくあつたことと思われる。今回は平安時代初期の観音像に絞って検討したが、他の尊格、または他の時代の作例についても、今後さらに検討を重ねてゆきたい。

図1、2は伊東史朗責任編集『日本美術全集』4（小学館、平成26年）より転載した。